

## 農政産業観光委員会 県内調査活動状況

1 日 時 平成25年11月14日(木)

2 出席委員(10名)

委員長 石井 脩徳

副委員長 久保田松幸

委員 武川 勉 河西 敏郎 桜本 広樹 皆川 巖 渡辺 英機

鈴木 幹夫 土橋 亨 水岸富美男

欠席委員 なし

地元議員 木村富貴子議員

3 調査先及び調査内容

(1)【やまなしメガソーラー(甲斐)】

調査内容(主な質疑)

問) 県、甲斐市、韮崎市の収入は、20年の事業期間の中でということか。

答) そのとおりである。厳密に言うと、土地の貸与が22年間である。建設をする1年と、撤去をする1年も含まれているので、若干、ずれもあるが、22年間という考え方である。

問) 最終的に22年が経過した後、原状はどういう復帰の仕方になるのか。

答) 原状回復ということなので、施設を撤去していただいて返していただくことになる。

問) 傾斜地なので、県では戻ってきた土地をどんな形で保全するのか。例えば、何かを植えるのか。その土地の活用方法については、どのように考えているのか。

答) 現時点においては、その後についてはまだ具体的な検討を行っていないが、当然、その後どうするのかということが重要な課題になってくる。そのまま太陽光発電所として別のものを誘致していくのか、あるいは使えるようであればそのまま残すのか。20年経過する中で償却の状況等もあるので、事業者なども含めて、その後の活用の仕方についてもよく検討していきたい。

問) 代々、人もかわり、体制も変わっていく中で、後の人にバトンタッチする場合でも、後のことを定期的に考えておくことが大事だと思うので、そのことを忘れないようにしてもらい

たい。

答)まさに御指摘のとおりであり、期間の長い事業である。貸したから貸しっぱなしというわけにもいけないので、定期的に三井物産側とも協議の場を設けて、使い方、管理の仕方など、いろいろ地元の皆さんの御意見もあろうかと思うので、そういったことをよく踏まえながら、管理運営に当たっていきたいと考えている。



第3委員会室において概要説明・質疑を行った後、やまなしメガソーラー（甲斐）の視察を行った。

## (2)【意見交換会】

出席者

- ・ 本県への移住者、受け入れ市町村担当者の方々

内容

意見交換

「やまなし暮らしについて」

主な意見

議 員) 皆さんには、実際、仕事を通じて山梨県の応援もしていただいているようである。

それぞれ移住先で、行政のインセンティブがあると思う。例えば、住宅の補助を受けているとか、子供さんに対する補助を受けているとか、インセンティブを受けている例があれば、教えてほしい。また、山梨に移住したメリット、デメリットがあれば教えてほしい。

出席者) 山梨へ来たメリットといえば、スモモの栽培を行って3年目になるが、ことしはよくとれたほうなので、猿もよく来るが、ことしは猿が来る前に収穫することができてよかった。そのほか、稲作を始めてことしはやっと収穫ができた。

出席者) 移住のきっかけという点では、行政からのインセンティブはなかった。ただ、実際に移住してみて、自分が何で生活をしていこうか真剣に考えることになったが、その中で県の農務事務所を中心に、上野原市の担当の方々から、こういう制度があるからやってみないかということで、ことしの9月から就農給付金の支給を受けて生活ができています。そうやって生活させてもらえることと、農業を勉強させてもらえること、あいた時間を使って地域の方と交流して学べる時間がつくれていたということでは、とてもありがたいと思っています。

通いで山梨に来ているときと、実際に山梨に住んでみるのとでは全然違う。地域の方々もしっかり面倒を見てくれることがメリットだと思う。逆にデメリットとしては、プライベートな時間はない。1歩家の外に出れば、地域の方に声をかけられるので、誰の目も気にせずに自由に遊ぶということはなくなった。

議 員) 皆さんのお話を聞いていると、山梨は空気がいいとか、天気がいいとか、水がおいしいというように、自然環境がいいということが多い。

人間関係については、山梨県人は割合なじみにくく、甲州弁で言うと「とっつきにくい」と言われているが、一旦仲良くなると、非常に人間関係が強いと言われている。皆さんはその点についてどのように感じたか。特に、甲府市にお住まいの方は無尽会などに入ったか。

出席者) おっしゃるとおりで、人間関係では最初、非常に苦労した。やはり東京から来たということで、よそ者扱いされ、何もできない状態だった。山梨でも引き続き料理の仕事をやりたいと思い、商工会議所に何度か足を運んだことがあった。そうしたら「そんな料理なんか仕事にならないからやめてしまえ」とか「パン屋をやれ」とか、ここはこういう土地だからこうだとか、いろいろ吹き込まれた。山梨の食材を使ったものをつくりたいと言っても、制度の紹介は全くないし、近所の方の目も気になった。

仕事面でいろいろ活動していく中で地元の方とだんだんなじんで、今は非常によくしていただいてありがたく思っている。ただ、それには非常に時間がかかる。また、これから山梨に住みたいという方々にとっても、これはデメリットというか、山梨に来てみないと気がつかないことで、「山梨はこんな土地だったのか」と言われたくないし、そのためにはどうしたらいいのかということは思っている。

議 員) 全くそのとおりで、一旦なじんでくれるといいと思う。割と義理人情に厚い人が山梨には多いと思うので、ぜひよろしくお願ひしたい。

こちらに住んで、ふるさと愛に目覚めるために、こちらの文化や歴史になじんでもらいたいのだが、そういうきっかけはあったか。

出席者) まだない。

議 員) ぜひ、山梨の歴史や文化に親しんでいただきたい。

議 員) 移住の受け入れ市町村に対する要望はあるか。

出席者) 私が移住した北杜市は、比較的移住者も多く、人気のエリアということで、こちらから出向いていないと情報がない。山梨は東京の隣でも、いきなり来るのには移住者も不安があると思う。空き家や賃貸住宅の情報が皆無だったので、自分で探すのにとっても苦労した。移住や二地域居住を希望するお客様が一番求めているのは賃貸物件であるが、移住して地域になじんだところで、近所の方から借りることができるようになるまでにはかなり時間がかかるので、もう少し窓口が広いともっと入って来やすいのではないかと日々感じている。それに関して、何か改善があると非常にありがたい。

議 員) 市町村役場の担当の方に伺うが、そういう相談件数はどれくらいあるのか。

出席者) 基本的に、移住に関する総合窓口が整備されていないことが一番の課題だと思う。各担当でそれぞれ事業をやっているが、やっぱり縦割り行政というところがあり、向こうへ行ってください、こっちへ行ってくださいという部分が見えるので、そこを改善していく必要があると思う。

南アルプス市でも空き家バンク制度があって、問い合わせの件数は多いのだが、登録

物件が少ない。登録物件を拡大していくためには何が必要かということ、まず行政の支援として考えていく必要があると思う。一番課題になるのは、恐らく改修費用等が出せなくて空き家として登録できないということと、相続されて東京あたりに住んでいる方が年末やお盆などに戻ってくるときに、仏壇や農地をそのまま相続しても渡すことができないということで、どうしても登録までこぎつけない。そういったことを制度改革していく必要があると感じている。

出席者) 南アルプス市でも話が出たが、身延町でも全く同じような状況である。物件があるかという問い合わせが非常に多い。ここ2、3年、かなりふえている状況である。生活をどのようにしたらよいかという内容の問い合わせはあまりない。身延町でも空き家の物件がなかなか登録できない、貸せる空き家がないということで、南アルプス市と同じような理由ではあるが、そういった部分をどのように解消していくかが、空き家バンク制度の今のところの悩みである。

出席者) 移住に関する問い合わせは、これまでも週に3件ほどあったが、富士山の世界文化遺産登録が決定した6月以降は件数がふえ、1日に2、3件という日もある。富士河口湖町でも南アルプス市や身延町と同じような状況で、空き家バンクに65件ほどの登録があるが、その内17件は売ってしまったとか、物置にしたいので返してもらいたいということで、実質は50件ほどで、すぐに埋まってしまうような状況になっている。空き家の登録には四苦八苦ししている。「富士山暮らし応援隊」のメンバーの中に不動産業の方もいるので、町役場で抱えきれない部分は、その不動産業の方から物件の紹介をしてもらっている。

議員) 東日本大震災発生後は、特に東北地方から山梨に来られた方が多く、当時は市町村と県が連携して問題なく取り組んできた。

皆さんの移住はそれとは状況が違うが、移住者間で連携をして活動している方もいる。これは、市町村や県のレベルとは違ったチャンネルだと思う。行政として県も取り組んではいるが、現実的な施策に反映されていないように思うがどうか。

出席者) 8月の終りに、移住者を集めて交流するイベントを県が開催したが、山梨に移り住んで10年ほどの間に感じていることは、そういう場が非常に少ないことである。また、移住者同士で交流したいと思っても、情報がなくて苦労している。例えば、別荘地の中の近所の移住者とは話をするが、それ以外の人とはほとんど話す機会がない人が多い。8月のイベントについても知らない人が多かった。

移住者との接点は、移住者同士でも、移住者と行政においても少ないと感じている。行政が主導した移住者同士、移住者と行政の交流も必要であるし、民間の、我々のような移住してある程度長い年月が経った者が主導して、そういった方たちとのネットワークづくりを内側からサポートしていくことも必要だと感じている。

もう一つは、私はもともと宿泊業に従事していたが、5年前に牧場を始めてから、地域との交流が深まったということである。移住者との交流だけでなく、畜産業は非常に狭

い世界なので、例えば県の担当者がしばしば訪ねてきてくれた。動物の飼育について専門的に学んだことがなかったので、牧場の始め方から指導してもらった。また、畜産に限らず、果樹農家等の生産者同士の交流が広がっていったことが、私にとって、山梨での生活を充実させていく意味で、非常にいいことだったと思う。他の移住者を見ていると、そういった地域の方との交流が圧倒的に少ないので、どうつなげていくかが課題だと思う。行政がその役割を担うのか。我々のような移住して長い者も、そういった活動をしているが、単発ではインパクトを出すのが難しいので、何かしら集まりのようなものをつくって、支援をしていくことが必要になると思う。民間のネットワークがある人や、移住して長い期間が経過した者が主導して、行政と協力してやっていくことが必要だと最近感じている。

議員) ありがとうございます。

東日本大震災の関係で約800人が移住したが、その方々にはスポンサー団体がついている。一般の移住者の中には、夢破れて挫折し、もとの地へ帰ることになる方もいる。そんなことをさせたくはないのだけれども、経済的に余裕のある方はそうではないが、生活にも苦慮する方もいる。確かに行政の役割もあるが、先人として移住者のネットワークをつくっていただき、市町村と話をし、それに県が一体となるような組織をつくっていただければと思う。

議員) 地域で行うさまざまな催しがたくさんあるので、できればアンテナを高くして、どんどんそういうところへ出かけて行って、せっかく山梨に来たのだから地域の人たちと仲良くなってもらいたい。

特に子供さんがいる方はPTA活動もあるし、子供さんのほうが先に友達をつくるということもある。そんな感じで地域の方と仲良くなって、山梨を出たくないというくらいになっていただきたい。

私は大学入学から10年間東京にいたが、東京はほとんど近所の人とは関係のない町で、田舎の良さがわかった。

ぜひアンテナを高くして、ちょっとしたことでも地域の催し物に出かけて行って、地域の方と話ができるようになっていただければ、もっとやまなし暮らしをエンジョイできると思う。

出席者) たまに地域の寄り合いがあるが、高齢の方が多く若い方がいない。お葬式やいろいろな地区の活動もあるが、組というものを大切にしていかななくてはと思って、話し合いには参加している。本当に若い人がいないのかと不思議に思うほどであり、もっと若い力が欲しい。山梨県も人口がどんどん減ってしまって、若い人も子供も減ってしまっているのもっと若い力で活性化することが大事だと思う。

また移住というと、どうしても老後の生活というイメージになっているが、もっと若い人に来てもらって、子供をこの自然豊かな土地で育てて、子供にとってここが本当の自分の田舎だと思えるような好きな場所にするために、我々も何か努力できればと思う。人口がふえることが一番の願いだと思うが、それができない状態は歯がゆく思っている。

出席者) 地元の人たちとグランドゴルフやパターゴルフを恒例的にやっている。我々移住者も参加させていただき、賞品ももらっている。先日は、地域対抗の運動会があり、仲間とともに参加させていただいた。今度、収穫祭もあるのだが、地域の方にも集まっていただいて紹介する。道祖神の関係では、毎年1月14日に地域の皆さんと一緒にどんど焼きをやっている。

地域の方にはいろいろと親切に教えていただいている。農薬散布も地域の方に積極的にやっていただいているので、大変助かっている。

議員) 皆さんのプロフィールを拝見すると、山梨への移住を進めていく事業ができそうなメンバーだと思う。例えば、行政の広報を担当して情報発信をしている方もいるし、外国に住んでいた方はその国に対して山梨への移住を発信していただくこともできるし、山梨の資源を生かした食のPRをしていただいている方、1次産業の担い手として事業を行っている方、不動産の情報を発信している方もいる。皆さんが連携して、行政にかかわって即効果があるような事業を打っていただくこともできると思う。御自身の仕事にも直結することにもなるので、ある意味、無駄な労力にもならないと思う。

そういった点で、興味を持たれた方、これからみんなでやってみたいと思う方はいらっしゃるか。

出席者) 私の場合には外国に住んでいたもので、日本に住むということではどこに住もうかと考えた。日本にいて国内で移住しようということではなかったもので、考え方が違っていたかもしれない。

現在、富士河口湖町で暮らしており、ほかにも移住された方がいるが、移住のきっかけ、動機、目的は人それぞれである。なので、これをやれば移住者がふえるということは、なかなか難しい。

移住されている方は、仕事で転勤になったとか、結婚など家族の異動で来たのではなく、何かのきっかけで来たいという思いがあって来ている方が多く、みずからの意思でいらっしゃるっているので、その思いが強ければ、多少困難があろうとも移住してくると思う。なので、そうではない方に移住してもらいたいということを考えるときに、メディア等を見ていると、日本全国で移住のPRが相当数なされている。そういう中で山梨を考えると、例えば富士山や自然などの山梨の情報発信は皆さんにアピールされていると思う。そこから先のもっと現実ベースの生活といった部分は、自治体が個人の面倒を見ることは難しいと思うので、富士河口湖町の場合は「富士山暮らし応援隊」という形で民間の有志の方が集まって、具体的にどういったサポートをすれば、移住に興味のある方が移住に踏み切ることができるかという部分で、細かいフォローが必要だと思っている。

山梨に限らないと思うが、通常、都市部から地方への移住が多いと思うが、都市部に暮らす方が地方に来て不自由されるものの一つに移動があると思う。車を運転できないと移動ができない。車を持っていないとか、運転できない方がいらっしゃると、地方に移住してきても暮らしの行動半径が非常に狭くなる。自治体の支援は住の部分だけでなく、移

動の部分についても何か施策があれば有効に働くのではないか。高齢化もあり、地域を巡回する小型のコミュニティバスなどの動きはあるが、そういうものが少しあれば、地域の中での移動はできると思う。

私が住んでいる場所の関係もあるが、地方に来てもう一つ大きな問題は、仕事をどうするかということである。地方になればなるほど、誰かに雇ってもらえる雇用機会が非常に少なくなり、それでは自分で何かをやらなければならないというふうになっていくケースが多いと思う。これは世の中全般であるが、インターネット環境の発達により、在宅で、個人でいろいろな取引をしたり、事業を起こすような環境もあるが、ネットの環境が充実しているのは地方では都市部だけである。私の住んでいるところは、インターネットを引こうと思っても引けない。かろうじて、携帯電話会社のデータ通信が唯一の手段である。技術が進歩しているので、携帯電話のデータ通信でもスピードは十分対応できているが、県内にくまなくIT関係が充実しているかという点、まだまだそういう環境にないの、都道府県を初めとする自治体の問題ではないかもしれないが、仕事の面で何か自分でアイデアを実行しようとするときに必要なインフラだと思う。

議員) 先ほどからお話を伺って、山梨が好きになりかけている、あるいは好きだという方の集まりで、大変うれしい。地域によってはいろいろなところもあるけれど、古閑さんは地域では若いほうで、まさに希望の星ではないか。また、上野原の西原地区に27歳の青年が来たということになれば、それだけでも地域は盛り上がっていると思う。

生活していく中で、今まで住んでいたところといろいろ比べて、こんなはずではなかったという思いや葛藤もたぶんあると思う。私からのお願いとして、山梨へ来たということは非常に縁があるので、御苦労もあると思うが、ぜひ本当の意味で地域に溶け合い、そして山梨県人となっていて、皆さん方の知り合いの方などにも、「山梨はいいところだよ」と言えるようになっていただければ、大変うれしいしありがたい。

きょう、皆さんとお会いする機会があり、移住者の皆さんの生の声を聞いたということで、私どもも改めて考え方を直しながら、県議会としても移住の受け入れ、二地域居住について勉強していきたい。皆さんも、楽しい生活を送っていただけるようお願いする。

出席者) 先ほど、行政と連携して、民間のほうでもネットワークづくりを進めてもらいたいという話があって、移住者自身もそういう取り組みができないかという話をいただいたが、移住してみたいと思うけれども踏み切れない方の壁というのは、どういうステップがあるかと考えてみると、3段階くらいあると思う。

山梨に住むということは、非常に遠く、どこか遠くに行ってしまうというイメージを持っていた。もう一つは、どこか別のところに住むということは非常にお金がかかるという、イメージ的な間違いを恐らく都会の人たちはしている。自然豊かでいいところというイメージは持っているが、何だかものすごく遠くに行くと、お金がかかると思っている。実際には、東京から1時間ちょっとで来られる。私の住んでいる地域からは、甲府へ行くのも東京の端に行くのもあまりかわらないくらいで、実は非常に近いが、遠いイメージを持っていたし、あとは生活にかかるコストも東京に比べると、何分の1くらいである。



収入がぐっと下がるということは、生活していけないのかと思うと、生活にかかるコスト自体、特に住宅のコストは東京の何分の1にもなるので、まず入ってくる段階でイメージのギャップが大きい。これについては、我々移住者の側で何とかするというよりは、行政で取り組む部分なのかと思う。それについては、広告宣伝など、一番予算を割り振るべきところだと思う。

次のステップは、先ほどから話に出ていた生活していくことが成り立たないということである。仕事をどうするかというのは非常に難しいが、生活にかかるコストが下がるということをきちんと伝えることができれば、今、援農隊といった補助金的なものも2年くらいは出るので、そういったものを使えば、まず来てみるができると思う。それについても、今、現状のPRができていけば、解消できているのではないが。

3つ目の壁は、いかに充実した生活を送っていくかというところで、その段階で大きな問題が出るのは、人との交流ではないかと思う。それが、まずは移住者同士の交流であったり、地域の人との交流であったり、そういった部分で、そこは行政だけでできるかという、やはり我々移住者がまず移住者同士のネットワークを持ち、私自身もいろいろな地域の方との交流の中で、素晴らしい生活をさせていただくことができたと思っているので、その御恩を返すためにも、新しく入ってきた人たちにネットワークをつなげていく。ネットワークづくりは、どちらかという我々のような民間が主導して、行政にサポートをしていただく形が適切だと思う。仕事の面、ネットワークという部分で、すごく楽しい、うまくいくという例を、我々自身が見せることが大事である。そのためにも、ネットワークづくりというものを、ぜひ県の力を借りながら、まず自分の地域の人たちを集めて、交流を図るようなことをこの冬あたりからしていきたいと考えている。市町村だとニーズも限られ、なかなか難しいと思うので、県の担当者にもいろいろ相談に乗っていただければ、県がいくつかの地域ごとにこういう人がいるといった情報をいただいて、宣伝活動を助けていただいたりすれば、民間としてもネットワークづくりの活動を加速することができると思うので、協力してやらせていただければと思う。

委員長) ほかに行政への要望はあるか。

出席者) 遠いというイメージはある。それをいかに拭い取るかが大事である。物理的な距離もそうだし、外から来た者と地域の人との距離をいかにして縮めていけるか。遠いというイメージを拭い去れるか。それを解決するには、通う機会をつくることしかないと思う。初めて山梨に来て富士山を見て、いきなり仕事もやめて家も畳んで移住を決める人はまずいない。何度も何度も富士山を眺めに来て初めて、山梨はいいところだと思って、また少し通ってみて、自分の周りの生活環境も変わるというようなタイミングで移住してくるのが大体だと思う。

そういったときに、通う場やきっかけがあって、人と交流できる場所があったり、それは行政主導でもいいし、民間主導の地域の人たちが盛り上がっているところに東京の人が入っていける機会でも、形はなんでもいいと思う。通うということが起きない限りは、通う場、機会、きっかけがあるという情報が首都圏に伝わらない限りは、まず人は来ない

だろう。逆に山梨は、千葉以外の関東、埼玉、神奈川、東京に近いのだから、長野に通うよりは山梨ではないですか、と言いやすいと思う。また、富士山もあるし、ワインもあるし、山梨県内でもいろいろな特色があると思うので、それぞれの地域の得意な部分を前面に出して、通うきっかけづくりをそれぞれがしていって、全体として通う人がふえて、気がついたらそこに住む人もふえていけばいいと思う。だから今は、あまり人を住ませよう住ませようというよりは、まずは楽しいきっかけをつくって、通う場づくりからだと思っている。

出席者) 広報を担当していて、伝えることを仕事にしているの、常日頃、考えていることが、書きすぎた内容は誰も見ないということである。ジョイフルの掲載人数が多すぎるので、広告として伝えたいのならば、山梨県民の特徴を出して、例えば熱しやすく冷めやすい人柄とか、桃やブドウの産地だけれど実は農家では食べ飽きているとか、そういうおもしろいことで心をつかんで、後で資料を見せるというのもいいのではないかと感じた。



防災新館 304 会議室において、意見交換会を実施した。

以上